

上原専祿研究の到達と課題

—その主体形成論・学習論を中心に—

片岡弘勝

はじめに

- I 「世界史像」構成方法の理解
 - II 「国民教育」論および「地域と教育」論の理解
 - III 「国民教育」論と「国民」観および宗教論との関連理解
- おわりに

はじめに

地域生涯学習の学習過程における学習・教育内容編成論に関わる議論では、「学習主体に形成される認識の主体性」と「学習・教育内容の実質を支える財としての学問・科学の力」の両者をどのように統合すべきなのかという「学問の生活化」（「学問と生活の結合」とも呼ばれる）の問題が焦点となってきた。この問題は、とくに今日の大学が関与する生涯学習の場で厳しく問われるようになってきている。しかも、その際、いわゆる「科学知」と「生活知」との具体的連関、すなわち「知」そのものの内実はどうあるべきかという問題が焦点になっていることが注目される。

したがって、こうした問題に真正面から取り組む上では、当該学習場面で「知」そのものをつくり上げる担い手（主体）は誰なのかという主体論、その「知」はどのように構成されるのかという認識論、さらにはその「知」はどのような価値づけに基づいて構成されるのかという価値論といった基礎的な方法論理から構築される理論枠組みの検討が必要不可欠となる。

戦後日本の思想界、学界および教育界の中で、こうした問題枠組みに対応し得る理論を提起し、影響力を持ち続けた稀有な人物が、上原専祿（1899—1975年）である。上原は、世界史研究のみならず、大学論（教育論、管理運営論）、「国民教育」論、「国民文化」論、平和論さらには宗教（批判）論等々にわたる広範な領域で論陣を張り続け、多大な影響を与えてきた。このため、上原の著作や発言を部分的に取り上げ、引用ないし援用する事例がおびただしい数にのぼる。にもかかわらず、上原の思想・理論の総体を対象化し吟味・分析した研究はきわめて少ない。

その主な理由として、大きく次の3点があげられる。第1は、上原が取り組んだ問題領域が前述のように広範囲にわたるため、統一的な見地から把握する上での困難な条件があるように思われたのではないかという点である。第2には、上原が1969年の妻の死を医療過誤による「被殺」ととらえた後、亡妻への「回向」生活に入ったことを「隠遁」ないし「宗教世界への移行」とみてそれ以前の社会的な言動との間に大きな断絶をみる傾向があることがあげられる。さらに第3には、以上の2点以上に重要な理由として、まことに厳しい学問実践を自他に要請する上原提起とその成果を前にして、それを直視することによって随伴する自らの責任を回避するため「棚上げ」する傾向がみられると考えられることである¹⁾。

ところが、上原の遺族（長女）である上原弘江氏の編集によって『上原専祿著作集（以下、『著作集』と記す）』（全28巻）の刊行が1987年から開始され、2001年1月末時点で18冊まで公けにされた。このことによって、未発表論稿や1969年以後の上原の活動・生活状況をはじめ、上原の生涯とその活動を理解するための資料等が提供されつつある。このため、研究課題を部分的テーマに限定した把握が少なくないとはいえ、上原思想を対象化する試みが増えつつあることは事実である。

本稿は、冒頭で既述した課題意識に立ち、今日までの上原専祿研究の到達を検証し、残されている課題を明らかにして集約する。その際、取り上げる上原研究は原則として、上原の思想・理論を真正面から対象化したものに限定する。上原の著作等に関する書評や随想的文章等の中で有意な事例については、関連する論点や文脈の中で取り上げることにする。

なお、以下に取り上げる引用文の中で論者が上原の著作等から引用している箇所については、混乱を避けるため当該箇所末尾に〔上原〕と記すことにする。

I 「世界史像」構成方法の理解

1 石原保徳氏「世界史への道—ヨーロッパ世界史像再考—」

① そのモチーフと主要論点

石原保徳氏の著書『世界史への道—ヨーロッパ世界史像再考—』（前篇・後篇、丸善ライブラリー、1999年）は、15・16世紀に始まったヨーロッパによる大西洋圏の「コンキスタ」（「ヨーロッパ人による世界諸地域の政治的・経済的・宗教的・文化的な支配」²⁾を「世界史の画期」として注目し、「大西洋圏造出運動に関わる問題を主題と」して取り上げることににより、「ヨーロッパ的世界史像」の再検討を世に問うたものである。石原氏は、この仕事を行う上で、上原専祿とラス・カサスの作品から「助け」を得たことを表明し³⁾、とくに上原については前篇の第四章で「いま、なぜ『日本国民』の世界史か—上原専祿による『世界史像の自主的形成』のすすめ—」と題して、上原の世界史論に言及している。

石原氏によれば、それは、上原の著作の「すべてとつきあおうとするものではなく、それらの作品の中からいわば狭義の世界史研究に的をしぼり、かつその中からあえて一点、一九六〇年刊行の『日本国民の世界史』（以降『世界史』と略記）をえらび出し、そこに彼の『世界史像形成』にみる動機や方法、その意味を読みとろうとする、いわば『上原作品を読む』こころみの第一次報告である」（括弧内は原文）⁴⁾とされたものである。

石原氏は、前掲の本題に入る前段階として、『日本国民の世界史』の基本構想が他ならぬ上原の世界史論・世界史像によって方向づけられていたものであることを、共同執筆者（江口朴郎氏、太田秀通氏、西嶋定生氏、野原四郎氏）および協力者（久坂三郎氏、吉田悟郎氏）のうち、江口氏や西嶋氏の回顧を例証して、編集・執筆作業の様子（西嶋氏は「上原ゼミ」と表現する）および上原執筆による序文の内容と同書の編集方針との照合に基づいて論証している。

石原氏は、その上で1955年5月刊行の初版（『高校世界史』（実教出版KK・1956年度から高等学校社会科教科書として使用された）から1960年10月刊行の第3版（『日本国民の世界史』岩波書店）まで、編集・執筆者の主体的判断によって大幅な書き改め・改訂がなされた事情を照合させて、この経過を、「『世界史像は、書きかえられるべきもの』、『世界史像は権威であってはならない』との上原の命題の見事なまでの実践であった」⁵⁾と述べ、課題意識・世界史認識の深化と「世界史像の形成」とが相互に支

え合う「往復運動、彼の言葉によれば、『世界史像形成の動的過程』を、さきの三つの版によって具体的に私たちに示しているのである」⁶⁾と記している。

石原氏は、前記のように述べた後、『日本国民の世界史』の内容上の特徴を指摘しつつ、上原世界史論の特徴に言及している。その主要な点は次にあげる通りである。

A 石原氏は、「中国文明を中心とする『東アジア』、ついで『インド』と『西アジア』の地域文明の三つをもって第一部『東洋』文明圏を構成し、つづく第二部では、それらと併存していた『西洋文明』の対象化をこころみ、第三部においては、世界史上の『新事態』の発生、つまり“新しい西洋”の形成と展開と、それによって従属の対象として客体化される世界諸地域の動きをおい、第四部で、第三部で描かれる新しく作り出された世界秩序の問い直しが本格化す『現代の世界』を扱う、という四部構成」が「これまでの世界史像の常識を打破した」「独自の方法」の一環であることを指摘する⁷⁾。

B 石原氏は、中でも独自の「方法的特質を最も鮮明に伝えるものは、『東アジア』の歴史的展開を主題とする第一部第一編の位置づけ方である」と述べる⁸⁾。

石原氏は、さらに、その位置づけ方の第1の問題として、〈なぜ東アジアから書き始めているのか〉という問題があり、それに対して、東洋文明圏の歴史が西洋文明圏のそれよりも古いと執筆者が考えたからではなく、「日本人」の歴史が東洋文明圏の歴史であり、「日本文明」が中国を中心とした東アジア世界の歴史の動向の中で形成されたこと、現代日本の生活現実や実際問題が、東洋文明圏とくに東アジア世界の歴史現実であること、「われわれ日本人の歴史的自覚の確立は、これらの根本事実の認識から始めなければならないと考えたから、このような記述順序が選ばれたのである」のであって、上原が「ヨーロッパ中心の世界史像の裏返し」としての「アジア中心主義」を主張したのではないことを指摘する⁹⁾。

C 石原氏は、「日本のおかれてきた歴史的境位が、そしてまた、現代日本がかかえる実際問題のアジア諸民族との共有という事態」〔傍点は原文〕がこうした独自の記述順序を要請していると上原が主張している点に注意をうながした上で、独立インドの初代首相・ネルーに寄せた上原の強い関心に注目する。すなわち、ネルーが獄中から娘インディラに宛てた形で記述した『父が子に語る世界歴史』がなによりも「その一行一行が、現代の人間ならば—殊に今のアジア人ならば—ゆるがせにすることが出来ない生きた問題への深い意識を通して書かれている点」〔上原〕〔傍点は原文〕、「主体的に意志する権利への自覚」〔上原〕と「その自覚に基づいて独立へのはげしい念願があり、その念願を貫き通そうとする構え」〔上原〕を持つ「アジア人のこころ」〔上原〕に上原は強い関心と熱い共感を寄せて、その「大きくて深く強い魅力」〔上原〕を語っていることを指摘し、「アジアは単に、過去の日本がくみこまれていた歴史空間にとどまらず、いやそれ以上にというべきか、当為集団としての『日本国民』と世界史的課題を共有する人々が住む歴史空間であった」という認識を、上原はネルーの前掲書を読みながら「深めていったにちがいない」と指摘する¹⁰⁾。

D 石原氏は、『日本国民の世界史』の中の独特な時期区分についても次のように指摘している。すなわち、それは、「中国及び東アジアについての歴史像は、『原中国人』〔「『人類一般』ではない」と石原氏は注記している¹¹⁾—引用者〕の誕生からアヘン戦争までを連続した発展をみせる固有の歴史として位置づけ、アヘン戦争以前と以後を大きく二分するという方法意識に支えられた」〔傍点は原文〕編成および記述が行われていることである。石原氏は、この点について「この構造は、『世界史』独自のものであり、類書を私は知らない」と記している¹²⁾。その上で石原氏は、こうした時期区分は、「『ヒューマニスト』らによる三分法(古代・中世・近・現代)、『社会や経済に関する発展段階説』、さらには、『人類』の進歩を『未開から文明へ』と展望する『啓蒙主義』の歴史認識」の全てが「ヨーロッパ産の時期区

分であり、それらをそのまま日本人の世界史像形成にあたって尺度にするわけにはゆかない」と上原が判断したことにも注意を促している¹³⁾。

E 石原氏は、「上原世界史像の特筆すべき方法」の1つとしての「13世紀世界史起点」論（「13世紀ユーラフロアジア世界」。ここでいわれる「世界史」は「人類史的世界史」とは明確に区別されている）について、次のように上原理論の射程を指摘している。

「ここで注目すべきは、彼[上原—引用者]が、この十三世紀のモンゴルの動きに対して日本を含めた東アジアや東南アジア地域の対応の中に、私たちの今日の問題状況の発端を感知していたことである。十五・六世紀に動きをはじめたヨーロッパの東西への拡大—それは今日の『東洋=西洋問題』の端緒をつくり出す—は、このユーラフロアジアの西方で展開された新しい動きの中から、生まれ出たものであったし、そのとき、この新しいヨーロッパの『進出』をうけた東アジアや東南アジアは、十三世紀にみられた諸地域の孤立・分散化を克服することがないままに生きてきた諸民族の居住空間であったことが示唆されていた。いや、それは、彼にしてみれば、現代アジアの問題状況でもあったのである」[傍点は原文]¹⁴⁾

F 石原氏は、15・16世紀に始まったヨーロッパによる大西洋圏の「コンキスタ」および「コンキスタ」批判の動きを詳細な資料分析に基づいて描いた前掲書の最終章（後篇）「新しい世界史像の誕生—コンキスタ批判のラディカルな展開—」の結びで、更に上原世界史論にふれて、その「世界史像の自主的形成」の方法が、「『インディアス史』が切り拓いてみせてくれた『世界史の方法』、とりわけ『この島の死者たち』の裁きを主題とする新しい『歴史の方法』の発見へと私を導いてくれた」ものであることを表明している¹⁵⁾。

② その意義に関する吟味・検討

以上の石原氏の指摘は、いずれも根拠を丁寧に明示した上での論述であるため、強い説得力をもつ分析である。なかでも既述した同書を著した石原氏のモチーフにつながる理論的関心を設定した上で「死者たちの裁き」という上原の「死者・生者」論と「世界史像」形成論とを統合させて把握する見地を具体的に提示した点が大変注目される。すなわち、Fの表明については、1969年の妻の死後、上原が「回向」のたたかいを続ける中で公刊した『死者・生者—一日蓮認識への発想と視点—』（未来社、1974年）で展開された「死者・生者」論の発想と石原氏の前掲書のモチーフとが連動していることを明示するものである。そしてそのことは、妻の死後の「東京退出」が「隠遁」では決してなく、むしろ上原が「世界史像形成」を一層深化させていったと石原氏がみていることを示している¹⁶⁾。

2 浜林正夫氏「史的唯物論への問いかけ」

① そのモチーフと主要論点

上原専祿は、戦後、「民族の独立」論や平和論を展開し、60年安保改訂反対闘争の理論的支柱の1人であり、また日本教職員組合が設立した国民教育研究所の運営委員長（後、研究会議長）を務めたが、マルクス主義者ではない。したがって、上原理論とマルクス主義者陣営との間に理論的な緊張関係があった。それは、上原理論に「階級的視点が弱い」とみて、「歴史における民族の問題」を積極的に評価する指向を過大評価であるとしてとらえて批判する動きとして現れた¹⁷⁾。

しかし、浜林正夫氏は、「史的唯物論」を発展させる立場から、そのための部分的要素ないし契機を上原理論に求めようとする。「史的唯物論は『開かれた体系』でなければならぬ」という見解を持つ浜林氏は、「それ以外の学問体系との対話を、多少でも促進することはできないだろうか」という問題意識¹⁸⁾に立って、その著『現代と史的唯物論』（大月書店、1984年）の中で、昭和史論争、文化人類学、社会史

および新従属理論（これはマルクス主義の一潮流ではあるが）が既存の史的唯物論に対して問いかけるものを主要論点にそくして整理する。その作業の筆頭にあてられた事例が上原理論であることから浜林氏の上原理論への注目度が高いことがうかがえる。

その際、浜林氏が採った論法は、次のようであった。すなわち、浜林氏は、①まず、上原がマルクスをどのように読み、理解したかということを確認し、②次に、マルクスとは異なる理論的関心から上原が提起した世界史論について、前掲の『日本国民の世界史』（岩波書店、1960年）を主な素材として説明する。さらにその上で、③史的唯物論の側が上原理論から問いかけられていると理解すべき点および、上原理論の弱点について指摘する。

これらのうち、浜林氏がとくに強調した論点のうち主要なものは次のとおりである。

A まず①については、上原はマルクスの方法を規定する根源的な理論関心を深く探り、その理論的関心自体を相対化してしまっているという見方である。例えば浜林氏は、「上原のマルクス理解において注目すべきことは、『社会の発展法則』（マルクスは、「アジア的・古代的・封建的・近代市民的生産様式」という必然的に継起する諸時期（上原は「発展諸段階」と表現する）の順に社会構成体が移行する法則をとらえようとする—引用者）を『実証・非実証の論議を越え』たものとみていることである。それは実証研究によってはじめてみいだされるものではなく、じつは当初からマルクスの理論的関心がそこに集中されていたもの、それだけが問題であったようなものであって、実証はこういう問題関心を『確認』するだけのものにとどまる、とされている¹⁹⁾と指摘する。浜林氏は、さらにこの点について「このような上原のマルクス理解はきわめて特異なものであって、反マルクスのでも親マルクスのでもなく、いわばマルクスを相対化した相対主義的な理解ともいべきものであろう²⁰⁾と述べる。

B ②については、前述したようにマルクスが「社会発展の法則」を客観的普遍的なものとしてではなく、マルクスの理論的実践的関心から主体的に選び、構成した歴史把握方法を採用した（と上原は理解した）点に限っていえば、上原自身もあたかもこれと同じ方法的態度で臨み、マルクスとは違う関心、すなわち「現代日本の生活現実」の中でも民族の独立という関心に収斂させて世界平和や個人の自由をとらえる課題意識に立って、人類史ではなく、世界史を指向したことが述べられる²¹⁾。

C ③については、上原理論がマルクス主義史家によってこれまで十分にうけとめられてこなかった最大の理由に、上原が提出した「民族」の問題がマルクス主義史家にとって「一種の衝撃」であったことをあげる。そして浜林氏は、「歴史の法則性か、類型か」という2つの命題が基本的な問題であるとした上で、上原がこの両命題を歴史事実そのものに関わるものとして実証的に検討したりする以前に、歴史を法則なり類型としてとらえようとした学者や思想家の意識の事実に関わる問題として取り上げる上原の方法をマルクス主義史家がどのように受けとめるべきであるかと問う一方で、同時に、上原の採用した相対主義的な方法でどのような客観的な「世界史像」が描かれるのかという問いを上原理論の側に投げかける²²⁾。

この問題は、「民族と階級」の問題と連動しており、浜林氏は、「この問題は、民族と階級とのいずれを歴史分析の焦点にすえるのが正しいのかという問題ではなく、およそ民族とか階級とかいう一つの焦点をさだめることが可能なのか、もし可能だとすればそれはどのような理由によってなのか、という問題である²³⁾と問う一方で、上原が日本国民の直面する諸課題として提示したもの、中でもその凝集点であるとされた民族独立という課題は、「少なくとも上原の諸著作の文面からみれば、論理的な根拠づけをもっていない」こと、当時の時期状況からみて「心情的にはよく理解できるけれども、しかしそれにして、そういう問題と無関係に歴史の研究をしていても無意味だといいきるほどの根拠はどこにあるのだろうか」と反問する²⁴⁾。

② その意義に関する吟味・検討

以上の浜林氏の指摘は、史的唯物論に対する柔軟性のある動的把握を指向する関心から上原理論がどのように受けとめられるのかという点を明確に述べていることが大きな特徴である。その中で、AおよびBの指摘について、上原がマルクス主義を相対化してしまっているという見方は、前掲した石原保徳氏の見方と重なるものである。

浜林氏の指摘のうちCの、「民族の独立」を諸課題の「凝集点として」とらえることが「論理的な根拠づけを持っていない」とする批判は、必ずしも充分なかたちで論証されているわけではない。この点は、「民族と階級」の問題とも重なる問題²⁵⁾であり、前掲した石原氏が着目しているアジア・アフリカ諸民族の独立やネルーへの上原の注目の仕方と合わせて、慎重に吟味することが求められている。

3 田中陽児氏の「歴史学と『世界史』教育」

① そのモチーフと主要論点

前掲した浜林氏とほぼ同じ関心から上原理論の特徴を析出したものが、田中陽児氏の「歴史学と『世界史』教育」（『岩波講座 世界歴史 30 別巻 現代歴史学の課題』岩波書店、1971年に収載）である。

田中陽児氏は、世界史という固有の問題に関する上原の先駆性を次のように確認する。

「戦後の史学思想史をどのように段階区分する場合でも、世界史を問題にすることの理論的な意味をもっとも根本的なところから問いただしてきた歴史家の一人として、まず第一に上原専祿氏の名をあげることは異論のないところであろう」²⁶⁾

「今日自明のこのように用いられている『歴史意識』『歴史像』『歴史認識』といった諸概念・名辞は、「一九五〇年代前半頃まではほとんど問題にされず、ひとり上原氏が、相互に関連させあいながら世界史にかんする理論的分析の際につかひこなしにしていたにすぎず、本来は『歴史科学』とは縁のうすい名辞であった」²⁷⁾

田中陽児氏は、このように述べた上で、まず「状況論的」に、次に「本質的な面」に分けて上原理論の特徴を析出している。

最初にその「状況論」についてみれば、「世界史の基本法則」、「発展諸段階」および「社会構成体」等の基本的なカテゴリーを用いるマルクス主義歴史学が上原世界史理論と鋭い緊張関係にあったはずであるが、これらは後に上原理論に全くふれることなく、「世界史像の形成」、「世界史認識の方法」に言及している状況があり、「上原氏の用いたこれらの諸概念がどこで歴史科学と激突し、どこで共通課題が設定できるのかをまともに論じたものが皆無にひとしい」と問題視している²⁸⁾。こうした問題意識は前述の浜林正夫氏のそれとほぼ同様の観点に立つものである。

次に、田中陽児氏による「本質的な面」からの上原理論分析をみることにする。

田中陽児氏は、上原の歴史学、世界史研究、歴史認識の方法を総体としてみた場合に理解される上原の発想、認識論の中に深く分け入り、総括的な表現ながら次のようにその特徴を指摘した。

A 田中陽児氏は、上原理論に固有なかたちでみられる認識方法の特徴について次のように表現する。

「第一に問題になるのは、そこにおける歴史学の内面化志向の強烈さであろう。この志向の過程において、自己参与の歴史学としての世界史学が、認識方法の追究としてまず現象し、その結果として世界史像の新形成が当面の課題となる。いわば、認識方法の錬磨と『像』の構造的な堅固さは函数関係にあり、方法意識の鋭さ・深さぬきに世界史像のあれこれのパターンを論ずることは不可能に近い。〔中略〕観点をかえてみれば、『独逸中世史研究』その他で発揮される実証作業の執拗さ——つきはなし、と、『現代認

識の問題性』その他で展開される意味づけの熾烈さ——たぐりこみ、とは上原理論的方法的な二大支柱であるが、このつきはなしとたぐりこみの振幅の大きさは比類がなく、そのために一見整然たる論理展開のあいだをぬって観念の飛翔作用が可能となる」²⁹⁾

B 田中陽兒氏は、上原が自らを含む「インテリ」の持つ「インテリ性」の限界を自覚し、「私自身の場合などにしても、これから死ぬまで歴史研究をやっていかなければならない義理なんか何もない。〔中略〕都合によっては歴史研究をやめてしまってもかまわないのだというほどのところで考えてみると、われわれの今までのあり方に、だいぶん問題があると思うのです」〔上原〕という自己放棄ないし自己告発への持続的な衝動が上原にみられることを指摘する。ただし、その一方で、この衝動が逆方向に反転した場合、「個体生命はあくまで受動的地位を占めうるに過ぎないものなのであろうか」〔上原〕という反問が出てくるのであり、これらの間の「相関性=背反性」の意味が上原理解にとっての問題となることに注意を促す³⁰⁾。

C 田中陽兒氏は、上原固有の「個」認識についてBと関連づけて次のように述べる。「ここで決定的に重要なのは、氏のいう個体的生命とは、いう所の権利の主体としての個人、西欧的人権意識に裏づけられた個性とは大きなちがいがあるといふ点である。それはむしろ、生の存在感覚に根ざしたものとしての『個』であり、強いていえば仏教用語の『衆生』の一人としての『個』であって、西欧的な人民大衆の一人としてのそれではない。歴史事象の『法則化的認識』『個性化的認識』『課題化的認識』という方法的な差異の指摘の際にあらわれる『個性』についても同じことがいえる。われわれは、氏が西欧史学の専門家であるところから、この『個』を、西欧風のインディヴィデュアリティ、またはエゴとして、あるいは普遍的・全体的なものに対立する範疇として理解しがちであるが、これは大きな誤りであろう。そのような意味を内包はしているが、そこに帰着することは決してないのであって、そこからみだす部分の揺動こそが上原理論のきわだった特色といいうる」³¹⁾

D 妻の死を契機として、上原は「『私というものの自己認識』と不可分な『死者との共闘』」すなわち、「死者のメディア」となって「裁きの実をこの世界であげてゆく」「回向」を行ったが、田中陽兒氏は、その「回向」実践の中で公けにされた「親鸞認識の方法」を取り上げて、その中にみられる対極的な2つの関心・意識および両者間の連関に注意を促す。すなわち、その1つは、「その人間にとって決して『過ぎゆかぬ時間』というものが存在すること」、「生者と死者の区別ではなく、両者の共存・共闘こそが重要であること」、「主導的なのは死者であって、生者は死者のメディアとなることなしには創造的なことはなしえないのではないか」という既存の「歴史学の領域を完全にはみだした問題提起」である。もう1つは、その一方で同じ課題意識に連なる一作業として提起される親鸞認識の「宗学的方法、西洋学的方法、世界史学的方法、親鸞的方法、国民的方法」といった「厳密きわまる歴史学的認識のエッセンスとして語られている『方法』」³²⁾である。

田中陽兒氏は、これら2つの関心が上原という人間の中で同時に存在し、しかも固有の連関をみせているとして、1969年4月（妻・上原利子氏の死去）後の上原の内面世界のきわだった特徴を次のように表現する。

「ただ問題なのは、このように徹底した資料および事実にたいする飽くことなき追究意欲と、いくつかの認識方法の構造的連関性にたいする分析論理の強靱さの双方が、これほどの混沌の折にもいささかの乱れもみせず、しかもそれが自己放棄ないし告発の一貫した心性と共棲しているという人間的現実をどう受けとめるべきか、である。〔中略〕これほどの追究意欲と分析論理が自分自身にふり向けられたとき、氏の間人総体がばらばらにうちくだかれることは当然予想できるにもかかわらず、年を追って氏はそのヴォ

ルテージを意識的にたかめつつあったかにも見え、夫人の死によって一挙にその『支え切れぬ事態』をさらけ出すことになった。氏の受けた打撃の大きさはそのまま、認識者としての氏のエネルギーの強大さのあかしである。同時にまた、上原思想の重心が、歴史認識の深化を^{ばね}発条とした人間存在の歴史的意味の追究に向けられていることもあきらかであろう。もしそうでなければ、存在感の喪失から、これほど一途にして異質な歴史認識を充溢させることはできなかつたにちがいない。しかも、この打撃をおしかえそうとして氏がはじめた最初の仕事は、戦後の自己にさかのぼり、これに痛烈な自己批判を加えることであった。この過程で氏は、生きのこった者と死んだ者との『関係』の絶対性を問いつめることによって、これまでの日本の歴史学・歴史研究とはきわめて次元の異なる学問的世界の開拓に一步をふみだした」(ルビ表記は原文)³³⁾

E 田中陽兒氏は、以上のように上原理論の特徴づけを行った上で、「観念性、非科学性」といった「誹り」を上原理論に投げかけることについて、その批判者自らの発想・問題意識や視点自体が逆に厳しく問われることになるという、上原理論の持つ特殊な構造について次のように述べる。

「上原理論の観念性を批判することは容易である。しかし、そのように批判する批判者自身の、原則を守ろうとする決意そのものが、一つの意識、一つの観念をつかみとった人間の確固とした精神の位相をしめしているものであり、逆にいえば、おのれのとらえた、あるいはおのれをとらえた観念の力の決定的な意味を立証するものといえよう。それは上原理論の追究対象であるとともに上原理論を追究することと無縁ではない。すなわち、それが唯物論であろうとなかろうとその人にとってはぬきさしならぬものとして現象するのであって、上原理論の中核にはこのようなぬきさしならぬ観念・意識をつむぎだす営為そのものへの歴史的な透視力が消し難く存在する。したがって、宗教性を排除することは決してないが、宗教性に帰着することはさらにありえない」[傍点は原文]³⁴⁾

② その意義に関する吟味・検討

以上に要点をみた田中陽兒氏の指摘は必ずしも必要にして十分な論証をするという形ではなく、むしろ上原理論の総体的な特徴観察を表現したものではあるが、上原の内面世界の奥深くまで入っている点が大変注目される。A、BおよびCの特徴点は、田中氏が挙げている例証以外の多くの例においても概ね相当する有力な見解である。中でもCの「個」認識については、上原が日蓮認識やヨーロッパの思想・文化に対する主体性を形成することについてその生涯を通して強烈な関心を持ち続けたことと関連して、大変注目される指摘である。また、BおよびDは、上原理論の根底にある、その内面世界を理解する上で欠くことのできない有効性のある視点である。

さらにEは、A～Dのような問題意識・発想に基づき、最も根底的な次元から学問や知のあり方を構想した、戦中・戦後思想史の中でも稀有な人物であることとも関連する見方である。その際、とくに上原理論とその認識者の認識が「ぬきさしならぬ」状況下におかれた人間の「意識」を取り上げる以上、「宗教性を排除することは決してないが、宗教性に帰着することはさらにありえない」という指摘にあるように、事柄の本質が宗教世界に関連しつつも既成の宗教のあり方を問い直す宗教批判という世俗世界の問題に属すとみる見方³⁵⁾と深いつながりがある。

ただし、Aの「一見整然たる論理展開のあいだをぬって観念の飛翔作用が可能となる」という指摘に相当する具体的な事例が特定されていない。田中陽兒氏が、ここで「観念」という語を用いる際、上原が「観念」や「意識」を現実世界に対する規定力を持つ実在的な力として想定していることを前提した指摘ではないかと推測される。上原がこうした方法論を持つことは、上原自身がM. ウェーバーの「エートス」、「倫理」や「精神」に関心を寄せつつその「個性化的認識」をとらえている点とも符号する。

4 吉田悟郎氏の上原世界史論報告

① そのモチーフと主要論点

吉田悟郎氏は、上原の世界史認識論の意義や（教育）実践面における具体化作業について上原の生前から継続的に報告してきた。その主要なものは、『歴史認識と世界史の論理』（勁草書房、1970年）、『世界史の方法』（青木書店、1983年）、「Ⅱ. 世界・日本・地域—上原専祿の『地域研究』によせて—」（西川正雄・小谷汪之編『現代歴史学入門』東京大学出版会、1987年に収載）および『自立と共生の世界史学』（青木書店、1990年）である。なかでも『世界史の方法』に収載された「世界史の起点—上原専祿の世界史認識—（その1～その5）」（初出は、歴史科学者協議会編『歴史評論』No270、273～276、1972年12月号、1973年2月～5月号に掲載）は、上原の2つの講演、すなわち岩波市民講座第一次講演「日蓮とその時代—世界史認識の意味と方法の問題によせて—」（1965年10月7日、10月14日）および第二次講演「モンゴル人の〈世界征服〉と13世紀ユーラフロアジア世界—日蓮認識の意味と方法によせて」（1966年6月2日、6月9日、6月16日の「輪郭の復元」を試みたものである。吉田氏は、この中で次のように述べていることが注目される。

A 「〔前略〕事態についての主体的な責任を問う、事態に対する主体的な可能性を探る、そのくさびを上原は1965—1966年、世界史という認識方法を創造していく作業のなかで日蓮においた。その日蓮は、上原にとっていわば歴史的分身であったし、また上原のいうように国民大衆にとっても分身であり原型であった」³⁶⁾

ただ、この指摘は生前の上原から次のような評価を受けている。

「〔前略〕この指摘は鋭い。それに触発されて、1965—66年の両拙講〔前掲した岩波市民講座での2つの講演—引用者〕の方法に自己点検を加えると、たしかに私は日蓮を『私の分身』として設定しようとしていた。しかし、この設定こそが右の両講演をして恣意性にみちた半透明の寓話たらしめたのである。『日蓮遺文』への私の姿勢の変化に立って、世界史研究『日蓮とその時代』の方法につき再吟味を加えると、私は日蓮を『私の分身』とすべきではなく、それとは逆に、私を『日蓮の分身』たらしめねばならなかったのである。そして、私を『日蓮の分身』たらしめてゆく捨身の営為こそが、『日蓮遺文』を色読するゆえんででもあったのである」〔上原〕³⁷⁾

② その意義に関する吟味・検討

吉田氏が前掲したように「歴史的分身」という際、どのような意味で「分身」であり「原型」であると上原がとらえているのか、ということについて一層関心が注がれる。

また、ここに引用した上原の見解は亡妻との「回向」と宗教批判の営みを重ねていた1974年のものであることから、「生者」がその主観の中で「死者」の無念の想念と対話を重ねて「死者のメディアとなって審判の実をあげる」という「死者・生者」論は、やはり亡妻の死を「被殺」ととらえた1969年以後に形成されたものである、と上原自身の主観的理解では、とらえられていることがうかがえる。

ただし、こうした「死者・生者」論に通じる同旨の発想は、1961年時に『戦没農民兵士の手紙』（岩手県農村文化懇談会編、岩波新書、1961年）に寄せて語られていた³⁸⁾。したがって、遅くとも1961年には上原理論の中に生まれていたこの「死者・生者」論が1969年以後に顕在化したととらえられる。

5 渡辺広氏の「上原史学の発展と『日本における独立の問題』について」

① そのモチーフと主要論点

渡辺広氏の「上原史学の発展と『日本における独立の問題』（『思想』6月号所載）について」は、上

原が論文「日本における独立の問題」を発表した直後に書かれ、上原が在職中の民研の刊行物『国民教育研究』No2（1961年）に公表された。渡辺氏の同論稿は、当時多数みられた上原の同論文に寄せられた批判とは異なり、その批判を意図したものではなく、上原の同論文を「上原史学の発展に即して内在的に理解」³⁹⁾しようとしたものである。

その際、「内在的に理解する」とは、戦前からの上原の著作の主要な課題意識、論点や成果を確認しながら、とくに上原の課題意識・問題意識の展開方向との関連で同論文をとらえようとするにであった。具体的には、戦前から1961年頃までの上原の著作の序文や「あとがき」等を引用して、次にあげるような特徴点を指摘した後、上原の方法論が当面する重要な課題を提出した。渡辺氏が指摘する上原史学の特徴のうち主要なものは、次のとおりである。

A 渡辺氏は、まず上原が「生の無窮と規範の絶対」（「[前略]もし又、時空に約して生の規範をば相対化し、規範相対化の無限過程に即して生の無窮と規範の絶対とを髣髴裡に捉へんとすることに学問的思考の本義があるとすれば、研学の道夥多なりといえども歴史考究の一途を辿らざるをえないのである。[後略]）をとらえようとする歴史哲学を基礎にしていると指摘する⁴⁰⁾。

B 渡辺氏は、第2次世界大戦後の「新しい問題状況」がドイツ中世史研究から「歴史認識の論理の追求」へと、上原史学を大きく転換させたと述べる⁴¹⁾。

C 渡辺氏は、上原はマルクス主義を「主体形成の立場」からうけいれたのではないかと思われるが、上原はその対極にある「個別化的認識」[マックス・ウェーバーの「個性化的認識」の誤記であると思われる一引用者]に愛着を持っており、その背景に「人格的個体[を尊重するという一引用者]の意識」がはたらいているが、しかし、マルクス主義の「法則化的認識」にも共感を惜しまないでおり、そして両方法のどちらとも異なる「課題化的認識」を探求していると述べる。その際、この方法に「倫理的精神」が浸透しているように思われることを指摘する⁴²⁾。

D 渡辺氏は、上原が一元論的世界観とは対極の多元論的世界観に立脚するアジア・アフリカの独立運動や平和共存論に対して、ヒストリスムスの立場から共感していると述べる⁴³⁾。

E 渡辺氏は、「自律的で主体的な民族集団の造出の問題」との関わりで、学問・政党の体質や労働組合が変わっていく必要を説く点に上原の「国民教育」論の核心があることを指摘する⁴⁴⁾。

F 渡辺氏は、上原論文「日本における独立の問題」への批判が主として事実の側面からのものであるのに対し、上原からの反批判が思想の側面[主体形成の課題が先にあるということ一引用者]からのものであり、両者の発想法の違いが感じられると指摘して次のように述べる。

「上原さんは課題化的認識の方法の探求を通じて、当為と存在との統一的把握を意図されているのですが、事実を思想によってつかみきれないでいるようです。当為と存在をどう統一的に把握するか、上原史学では未解決だと思います」⁴⁵⁾

「主体形成における客観的条件とその変化を究明することが必要ではないでしょうか。客観的なものと主体的なものの統一的把握が今後の上原史学の課題だと思います」⁴⁶⁾

② その意義に関する吟味・検討

以上の指摘のうち、Aについては、ほぼ同じ時期である1940年に上原が公けにした「史心」(あらゆる事物・事象を相対化する作業を重ねた末、相対化し得ずなお残る「絶対・普遍」の境地を追求する精神)⁴⁷⁾とも重なる精神・方法に着目している点で重要な視点である。B、CおよびEについては、上原の著作における自らの説明と一致する点である。また、Fの指摘については、そもそもマルクス主義の「法則化的認識」や、マックス・ウェーバーの「個性化的認識」とは異なる認識方法として「課題化的認識」を構想

すると上原が提唱しているのであるから、上原本人にとっても十分に理解され、自覚されている点である。上原は、こうした新たな方法を創造するという困難きわまる課題をあえて追求しようとしていたのである。ただ、この統一的把握方法およびこれを支える認識論は、戦前からの上原の思索や思想形成とくに日蓮理解の方法にまで立ち入らなければ判断できない性質のものである。

II 「国民教育」論および「地域と教育」論の理解

1 岡村達雄氏の「上原専祿『国民教育思想』の歴史的負性」論

① そのモチーフと主要論点

岡村達雄氏は、その著書『現代公教育論—臨教審批判と変革への視座 [増補改訂版]』（社会評論社、1986年）の中の第Ⅲ部第二章「戦後国民教育思想の歴史的負性—上原専祿における『死生』の問題をめぐって」という論稿で、上原の「死者・生者」論を含み込んだ上でその「国民教育」論を対象化している。岡村氏は、「上原論をふくめた国民教育論は、論理的レベルでは、近代公教育制度（体制）における公教育と私教育の分離と相互規制性、国家（教育）と国民（教育）との相互同一性、これらが『政治的国家』と『市民社会』の分離と二重化・相互浸透の関係にあることを理解できず、国民を国家に対置し、国民（教育）を価値理念化することにおいて、本質的に近代主義的観念論にほかならない」⁴⁸⁾という見方を持ちながらも、「国民教育」論の中でもとくに上原理論の〈死生の問題〉、死者との〈共存・共生・共闘〉に注目する。ただし、岡村氏の関心としては、「国民教育批判という課題を、公教育における人間の全体的存在のありかたをめざす〈宗教的なる問い〉のたてかたとして、考え抜いてみる必要」⁴⁹⁾から上原の「死者・生者」論に注目するのである。こうした問題関心から岡村氏は、妻・利子氏の死後の上原による「回向」および「死者・生者」問題への傾斜が、「生にたいする構えと、認識への根底的な変革をとまなうものであるとしたら、それはひとつの転生なのではないか」⁵⁰⁾と問題を提起した上で、上原理論に対する見解を展開する。その主要論点は次のようである。

A 岡村氏は、上原の「死者・生者」論が他者に共有され得ず「自閉に向か」⁵¹⁾っているものであるとみて、次のように述べる。

「死者・生者・生死の問題世界において、人間の生存・生活全体の問題を問い、追求するにあたって、上原の課題意識と方法は、わたしたち同時代の他者に共有され、開示されえる内実を備えているであろうか。[改行] 彼の方法と認識は、上原が⁷⁷遇々世界史家であり、学的対象としての世界史の研究において錬成し、仕上げてきたところに拠っているのではないか。そうだとすれば、いったんは、そのような自己を総体として対象化し抜いたうえで、終極において、のっぴきならないものとして、その方法・認識にいたるという媒介作業がなければならない。問題なのは、この媒介と架橋の構造である。[改行] はっきり言って、この点では上原は、むしろ、世界史家としての自己存在を先験的に措定し了解してしまっているのではないであろうか。だから、媒介も架橋することもなしに、方法・認識を呈示しえており、そこに葛藤はみい出せない」⁵²⁾

B 岡村氏は、第2次世界大戦後に上原が執筆した論稿に、「戦争責任というような問題が上原においてほとんど形をなしてあらわれていない」と述べて、「上原はその戦後認識、それに基づく実践的課題の提示において、戦前からの書齋人的な、瞑想の生活の人としての資質から、いかに自由でありえなかったか」という点について問題を指摘する主張を展開する⁵³⁾。

C 1950年代から60年代に本格的に展開された上原のアジア認識について、「しかし、考えてもみれば、このこと〔ヨーロッパの「近代」的なあり方を越えて、「現代アジア」が前進しつつあるという意味での「現代アジアの歴史的意義」に上原が注目したこと—引用者〕は戦後いち早く『魯迅』を媒介に『近代的なるもの』の本質を撃ち、東洋にとっての『ヨオロッパ』を対象化した、竹内好の思想的営為の追認にすぎなかったともいえる。もとより、これは上原専祿による認否の問題ではなく、客観的事実に属する」⁵⁴⁾と述べ、また「民族を思考の回路に含まない思想は近代主義であるといった竹内ほどには、上原は近代主義的なものの考え方に対峙しつづけるという構えがみられたといえない」⁵⁵⁾とも述べ、この問題に関する竹内好氏の相対的優位性を主張する。

D 岡村氏は、さらに上原批判を展開する中で、とくに「〈天皇制〉問題は、上原のアキレス腱であり、それゆえに〈非在〉であらざるをえなかった」とする見方を強調する。岡村氏は、その状況説明の1つに、上原がいわゆる「講座派」と「労農派」の間の論争に上原が関与しなかったことをあげ、この論争に加われば〈天皇制〉問題を回避することができないため、加わらなかったのではないかと述べている⁵⁶⁾。

この点については、岡村氏は、さらに同書の「あとがき」で「上原における天皇への『ご進講』体験」にもふれている。すなわち、岡村氏が同書の第Ⅲ部第二章にあたる上原批判を含む論稿を執筆した1978年5月の後に、増田史郎亮氏から、ねずまさし『天皇と昭和史』（三一書房、1974年）にある「二十七正月、自民党の鳩山内閣のとき、宮中御講書はじめに当って、洋書の講師の一橋大学教授上原専祿が西洋史について講義をした」という記述を紹介して、岡村氏の立論の1つである上原における〈天皇制〉問題の〈非在〉との関連に言及している⁵⁷⁾。

② その意義に関する吟味・検討

Aの点について筆者は、すでに別稿⁵⁸⁾で岡村氏に対する反証をあげて上原の「死者・生者」論を含む主体形成論が他者に共有され得たことおよび上原がその「インテリの大衆化」の実践の中で強烈な「葛藤」に直面していたことを示した。

Bの戦時中に「瞑想の生活」を送っていたことについては、上原は自らの回顧⁵⁹⁾の中で明示して、その消極的側面への反省に立って戦後の思索と行動を開始している⁶⁰⁾。ただし、上原が東京高等商業学校在学中、戦前における日本の対外膨張とそれを支える「インテリ」の意識に対する強い批判を公けにしている⁶¹⁾こともあり、Bに関する岡村氏のような全面的な批判が相当しない側面も存在することには注意する必要がある。

Cの点については岡村氏によって必ずしも十分な形で論証されているわけではない。敗戦直後から1950年代までの間におけるアジア認識および「近代主義」思想への対し方については、慎重な分析が必要であると考えられる。なぜなら、戦前における上原の思想形成をたどれば、むしろ上原の方が「ヨーロッパ近代」に対する主体性保持への指向が強烈であったとも考えられるからである。

Dの「上原における〈天皇制〉問題の〈非在〉」については、上原による〈天皇制〉問題に関する発言を網羅して慎重に吟味検討することが求められる。

2 朱浩東氏『戦後日本の「地域と教育」論』系譜における上原「地域と教育」論の位置づけ

① そのモチーフと主要論点

朱浩東氏は、その著書『戦後日本の「地域と教育」論』（亜紀書房、2000年）の中で上原の「地域と教育」論、「国民教育」論の形成過程をあとづけ、戦後の「地域と教育」論の諸系譜の中にその特質を位置づけている。同書は、第二次世界大戦後の日本教育史における「地域と教育」論を、「戦後改革期」、

「高度経済成長期」および「ポスト高度経済成長期」の3時期に区分して考察したものである。なお、同書は、一橋大学大学院社会学研究科に提出された博士学位請求論文「戦後日本における『地域と教育』論の史的展開」をもとにまとめられたものである。

朱氏は、戦後の様々な「地域と教育」論の中でもとくに上原理論の歴史的意義を強調している点が注目される。敗戦直後のコミュニティ・スクール論、「地域教育計画」論の「挫折」から1970年代以降の「地域に根ざす教育」論の生成・拡大にいたるまでの理論・実践史を総覧して、朱氏は、1960年安保体制下の高度経済成長期に発生した様々な地域社会の構造的変化という地域現実をふまえた上で、具体的現実的な「国民形成の教育」を地域を土台にして構想した上原理論が大きな影響力を発揮したとみている。この見方自体は、すでに藤岡貞彦氏が、繰り返し述べている論点⁶²⁾とも重なる部分が多いが、朱氏の考察は、これを上原の著作をはじめとする「地域と教育」論関係の言説の詳細な分析・整理により論証しようとした点が注目される。

朱氏は、後述する村井淳志氏の論文や、筆者（片岡）の1988年および1989年発表論文を含む先行研究の検討を経て、上原の「国民教育」思想形成の歴史的過程が必ずしも十分に考察されていないこと等を挙げて、とくにこの点について新たな考察を行っている。その際、朱氏は、A「上原国民教育思想の思想的基盤」、B「上原国民教育論の形成過程」、C「上原国民教育論の構造」およびD上原の「地域の地方化」論と国民教育研究所の六県研究との関連について論を展開し前述したような戦後史における上原理論の位置づけを試みているのである。その中でも注目される論点として、次の点があげられる。

A 朱氏の考察では、『歴史的省察の新対象』（1948年）や『学問への現代的断想』（1949年）をはじめとする1940年代後半における上原の著作の検討によって、この時期の「省察」が、1950年代以後の「国民教育」論の「思想的基盤」となっていることが述べられている⁶³⁾。

B 【上原専祿著作集】や民研の刊行物等に対する詳細な論点整理に基づいて、「上原国民教育思想」あるいは上原「地域の地方化」論の展開過程をあとづけた上で、朱氏は、「上原の問題提起は、1960年代半葉以降、次第に多くの教育学者たちによって共有されることになっていく」と述べて、幾つかの教育研究関係団体や教育学者の動きを紹介している⁶⁴⁾。そして、朱氏は、次のように述べる。

「このように、『国民教育を地域から』との先駆的な問題提起をなした上原が民研議長を辞任するのと入れ替わるかのように、教育学者たちは再び『地域』という言葉について議論しはじめることになる。このとき『地域と教育』論の第二期は終焉し、第三期が登場しようとしていたのであった⁶⁵⁾」

② その意義に関する吟味・検討

Aの点については、朱氏が「先行研究」としてあげた筆者（片岡）の1988年論文でも、後に本格的展開をみる「国民教育」思想の「萌芽」の性格を持っていると表現してその前後の論理の連続を指摘していた。朱氏は、それよりも詳細な考察を加えた上で、「思想的基盤」と表現していることは、思想の内実に積極的にふみ込んだ分析であると考えられる。ただし、「思想的基盤」と表現する以上は、戦前・戦中期における上原固有の思想形成過程をふまえた上で、戦後への連続面と断絶面を解明することが求められる。中でも日蓮をはじめとする上原の宗教観や上原に内面化された仏教像や日蓮像にまで立ち入った分析が不可欠である。筆者（片岡）は、1969年以降の「亡妻への回向」闘争の中で顕在化した「死者・生者」論に連続する見地のみならず、戦後に注目されたヨーロッパ精神への強烈な主体性指向、「民族の独立」への注目や「歴史的思惟方法と非歴史的思惟方法」の問題がすでに戦前・戦中期に形成されていたとみている。その1つの注目すべき上原の方法が1940年（41歳）に公にされた前掲の「史心」である。

Bの指摘は、前述した敗戦直後の「地域教育計画」論から1970年代以降に展開した「地域に根ざす教

育」論との間にあつて積極的な意義を持ったとして上原理論を位置づける見方と連動するものである。しかし、上原の民研辞職の経緯と理由からみて、「教育における地域問題」に着目したとして朱氏が挙げる教育学者の「地域と教育」論と上原理論との間に、必ずしも十分な順接要素をみることはできない。むしろ、上原の遺族（長女）である上原弘江氏が『著作集』の「編者あとがき」に記しているように⁶⁶⁾、また前掲した石原保徳氏が前掲書で言及しているように⁶⁷⁾上原の提起は「棚上げ」されたままであったのではないかと考えられる。中でもマルクス主義の立場に立つ教育学者と上原との間にあつた理論的乖離は無視できない。

とはいえ、岩手県農村文化懇談会の石川武男氏や熊本県水俣市中学校で公害学習の授業を創造した教師・田中裕一氏らの例外もあることはおさえられなくてはならない。この意味で筆者（片岡）は、朱氏が詳細にあとづけた、戦後史における上原理論の位置づけ方に大きな異論はないものの、上原理論とその周囲にいた幾人かの教育学者との間の理論的緊張関係は無視し得ず、この観点から上原固有の「地域」概念、「民族の独立」概念および、「主体性形成」の内実と「主体（個）」概念等を一層深く解明する必要性を筆者（片岡）自身の課題としても受けとめている。

3 田中昌弥氏の「上原専祿における認識方法と教育観の変遷—近代合理主義と個性的理解の問題をめぐって—」

① そのモチーフと主要論点

田中昌弥氏の「上原専祿における認識方法と教育観の変遷—近代合理主義と個性的理解の問題をめぐって—」（東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室『研究室紀要』第18号、1992年）は、「上原の教育論の全体像を明らかにする作業のためのノートとして、上原の議論の根底にある認識方法の変遷に焦点を当て、5つの時期に区分して教育観との関係を見る」ことを試みたものであり、副題に示されているようにその分析内容は、近代合理主義に対する上原の姿勢の変化をあとづけようとした。同論文で田中氏が示した5つの時期区分とは、次にあげるものであった。

- 1 「認識方法における近代科学の対象化と教育におけるヨーロッパ的価値のモデル化（1946年～1950年）」
- 2 「『ヨーロッパ的合理主義』批判と『民族』への着目（1950年～1953年前後）」
- 3 「多元をくぐって普遍へ—認識方法と教育論の有機的結合（1953年前後～1960年）」
- 4 「動的認識方法の展開と民研辞職（1960年～1969年）」
- 5 「回向の時期—非歴史的思惟のとらえ直し（1969年～1975年）」

田中氏は、このようなやや細かい時期区分を示して、各期における上原の著作・発言を引用しながら、認識方法と教育観の照応関係を述べた上で、「おわりに」で「これまで敬して遠ざけられる傾向のあつた上原が、認識と意味、普遍的認識と個性的理解とをどう統一するかという、日本の教育が今日直面している課題と格闘した先達として現れてきた」⁶⁸⁾と述べている。田中昌弥氏の同論文では主として次のような論点が注目される。

A 同論文の副題に示されているように、いわゆるヨーロッパ近代合理主義に対する上原の姿勢が、第1期には「モデル化」指向が強かったが、第2期以降にむしろそれに対する批判に変化していったこと、このこととの関連で「合理と非合理」あるいは「普遍的認識と個性的理解」といった二項関係の間で、その統合を模索した上原像が描かれていることが田中氏の同稿の大きな特徴となっている。

B 田中氏の同稿で注目される点のもう1つは、「回向」生活に入った上原が、「大衆」が医師と医療

に対する主体性を持つことを課題提起する発言を引いて、再「最の誤植カー引用者」晩年に至るまで、上原は、主体形成に教育が果たす役割に期待を持っていたのである⁶⁹⁾と指摘していることである。

② その意義に関する吟味・検討

田中昌弥氏の分析の仕方では、「世界史像の自主的形成」、日蓮の「色読」、「課題化的認識」、「歴史的思惟と非歴史的思惟」等、上原が独特の意味づけを込めた基本用語を、多くの場合、上原自身の説明を引く形のみで取り扱い、上原本人による説明の後追い確認作業である場合が多く、その個々の概念の内包と外延の内実まで踏み込まれているとはいえない。とはいえ、前述したような固有の見方も提示されている。

Aについては、第1期とされる時期に果たして上原が「ヨーロッパ的合理主義」を「モデル化」したか、否かについてはより慎重な分析と吟味が要請される。なぜならば、同時期および同時期以前に、ヨーロッパに対する強烈な主体性確立を自他に要請する発言がみられること、田中氏が第2期と示す時期に注目する「民族」への注目も、1950年代以降の時ほど強烈ではないが、それ以前の時期から確認されること、そもそも第1期とされる時期のヨーロッパ近代の積極面に言及する発言の文脈が、必ずしも「モデル化」しようとしていると断言できかねる性格のものであること、等があげられる。

とはいえ、田中氏の示す第1期には、相対的にみて、ヨーロッパ近代に対する上原の積極的発言が最も強い時期であることは確かである。ただ、その本格的な分析と評価は、戦前・戦中期の上原の思想形成時を起点にして晩年までの間、上原思想の基本軸は何であり、その基本軸との関連で各種の問題理解がどのように変容したか、を解明する中で行われるべきものである。なお、筆者（片岡）が仮説的に想定する上原思想の基本軸の1つは、1940年の時点で『史心抄』に表明された前掲の「史心」である。これを基本軸とみた場合、田中氏が主張する、1945～1950年頃のヨーロッパ近代に対する積極的発言は、田中氏が主張する「モデル化」ではなく、揺れの一種ではないかと考えられることになる。

Bの点は、前掲した村井淳志氏の上原理解の方法と逆となっている。筆者（片岡）は、生涯を通した上原の課題意識および両氏の論証を照合させてみるならば、田中昌弥氏の指摘に優位性があると考えられる。

4 宮菌衛氏の「上原専祿の世界史像形成・世界史論の展開」論

① そのモチーフと主要論点

宮菌衛氏は、「人類発展史的な、ヨーロッパ中心史観の克服」と「新たな世界史像」の自主的形成につながる世界史教育のあり方を考えるという問題関心から上原専祿の世界史論に注目し、次の3つの論文を發表している。すなわち、それは、ア「上原専祿による世界史像形成への出発—1940年代後半における『世界史』への取り組み—」（筑波大学大学院教育学研究科『教育学研究集録』第11集、1987年）、イ「上原専祿の世界史論の展開（1）—『民族の自律性』に焦点を当てて—」（『新潟大学教育学部紀要』第30巻第2号・人文・社会科学編、1989年）、ウ「上原専祿の世界史論の展開（2）—世界史認識における『地域』の意義—」（『新潟大学教育学部紀要』第32巻第1号・人文・社会科学編、1990年）である。1987年のア論文は、1945年8月～1950年6月の日米安保条約成立までの「教職エリート」の時期に上原が「人類世界という新たな現実にあふましい歴史認識の追求がはじまった」という点からみて、上原にとってこの時期が世界史像形成の問題意識の形成期であったこと、この時期の「世界史」論の中心課題は、歴史認識方法の追求であったが、中でも「マルクスの法則化的認識方法とヴェーバー的個性化（類型化）的認識の統一」および、「歴史的思考と非歴史的思考との交渉の在り方」が中心の問題であったこと⁷⁰⁾を明らかにしようとした。また、1989年のイ論文は、「上原の教育問題への関与が、上原の国民の主体性確

立及び学問観の変革への期待の現れであったこと」⁷¹⁾について考察している。さらに、1990年のウ論文では、「『自己・日本・世界の統一的把握』から『地域』を重視した『自己・地域・日本・地域世界・世界の統一的把握』へとなぜ変化・発展したのか。そして、上原の世界史認識方法において『地域』を重視することはどのような意味を持っていたのか」⁷²⁾について、民研での上原の言動に焦点化して検討している。中でも特に注目される論点として次の点があげられる。

A 宮藺氏は、1987年のア論文で、「教職エリートの時期」と上原自らが呼ぶ時期に、後に具体化する「課題化的認識方法」につながる「歴史的認識方法」を形成していたが、同時にこれとは別の「非歴史的認識方法」をも志向していたことに注意をうながす⁷³⁾。この点は、上原の日蓮観の検討をも元にして述べられたものである。

B 宮藺氏は、1990年のウ論文の中で「[前略] 上原は『地域の地方化』と『諸地域世界の地方化』が相互関連的・相互規定的なものであるという現状認識の上に、2つの『地域』に目を向けて行く」「ところに上原の現代認識・世界認識の鋭さがあったとってよかろう」⁷⁴⁾と述べている。

C 宮藺氏は、ウ論文の中で「[前略] 上原自身60年代には、現代認識の行為に大部分が費やされ、『地域』を軸とした世界史認識方法論が具体的な世界史像へと結ぶ作業はなされなかった」⁷⁵⁾と記している。

② その意義に関する吟味・検討

Aについては、1969年の妻の死後、「回向」闘争を展開した時期の上原の内面世界の分析にもつながる有意な視点であると考えられる。ただ、1940年代後半期におけるこの点は、既述したように1940年にけげにされた「史心」という方法との連続・展開の文脈でその論理構造を分析する課題が残されていると考えられる。なぜなら、上原にとって敗戦直後の「歴史的省察」は、大きな意味を持ったため、「史心」が戦後にどのように展開していったのかという点は、戦後の上原理論分析の中心的な軸の1つであるからである。

Bの点は、非常に多くの上原理論の引用例や援用例が欠落させている視点である。ただし、この点を含めてまったく独自の上原「地域」論を取り上げる上では、独特の「価値概念としての地域」論が前提する「価値づけ」方法（筆者(片岡)の研究では「地域価値づけ」と規定した⁷⁶⁾が、世界的規模で問われた「民族の独立」につながる「地域の自律性」を再発見ないし創造するための認識方法とどのように接続しているかという点にまで立ち入る必要がある。この点は、宮藺氏がイ論文およびウ論文で検討している「学問観の変革」や「社会認識形成の在り方」にもつながる論点である。

Cの指摘は、必ずしも相当しないのではないかと考えられる。なぜなら、上原が編集代表となって膨大な時間をかけて編集した『日本国民の世界史』（岩波書店、1960年—この本が1960年代の作業とはいえない面もあるが）および『クレタの壺—世界史像形成への試読—』に収載された文章、『世界史辞典』がある。既述したように宮藺氏が上原理論に関心を向ける問題意識が世界史教育のあり方である以上、前記した石原保徳氏が述べるように『日本国民の世界史』にみられる上原世界史論を取り上げることが必要である。

Ⅲ 「国民教育」論と「国民」観および宗教論との関連理解

1 村井淳志氏の「上原専祿の教育観と国民観」の関連分析

① そのモチーフと主要論点

村井淳志氏の「上原専祿の教育観と国民観」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第5号、1986年に収載)の発想は、「本稿は上原研究の第一歩として、教育論の具体的な内容検討は最小限にとどめ、上原が教育にかかわるさいの基本的発想を明らかに」することにある。その際、「教育という論点にしばっての時期区分」を「1950～1957年 教育研究への参入、1957～1964年 国民教育論の展開、1964～1975年 教育研究からの離脱」というように設定して、各時期における上原の国民観を分析した。

A その主張の展開は、次にあげる一文に集約されている。

「上原は国民の生活意識に対して強い批判をもちつづけ、そのありようが教育活動では少しも変化させられないと感じたが故に教育研究から離脱した」⁷⁷⁾

そして、さらに村井氏は次のような重要な点を指摘している。

B 村井氏は、1950～1957年の時期の上原の国民観について、「上原にあっては教育への期待と国民(の成長可能性)への期待が密着しており、またその期待は絶望感とも激しくせめぎ合っている」(括弧内は原文)⁷⁸⁾ことを上原の著作からの引用を例にして展開している。

C 村井氏は、1957～1964年の時期の上原「国民教育」論の「きわだった特徴」は、「国民の生活意識に対する批判、国民と教師への倫理的要求」であると述べる⁷⁹⁾。

D 村井氏は、1957～1964年時期の「上原の国民教育論にあっては、現状の国民の教育要求や生活意識と、上原がかくあるべきであると考えた要求、意識のあり方との落差が終始強調され、教育活動はむしろその落差を埋めていく営みとして思念されている」⁸⁰⁾と指摘する。

E 村井氏は、1960年安保闘争の高揚は、上原の国民観に一定の修正を迫るものであったが、上原は自らが目指す「日本国民の形成」が、未だ達成されたわけではなく、その可能性を論じることができる地点にきたというとらえ方であったことを指摘して次のように述べる。

「安保改定後の上原は知識人に対して激越な批判を行ない、知識人との対比において国民大衆について語る際はむしろ国民の積極性が語られるため、上原の国民観は複雑な様相を呈する。しかしよく注意してみると、大衆の積極性が述べられているのはまさしく知識人との対比においてのみであり、国民大衆の生活意識がそれ自体としてとりあげられたときには、上原のきびしい批判の姿勢が一貫していることに注目したい」⁸¹⁾

F 村井氏は、安保改定後の上原の感情を適確にあらわした表現として「焦りと無力感」を上原発言の中から引き出し、この時期の分析に基づいて、上原が民研を辞職した背景に「国民大衆への不信と絶望があったことは明らかであろう」⁸²⁾と断言する。

G 村井氏は、「1964～1975年 教育研究からの離脱」の時期の上原にとって、「大衆」は批判対象であると同時に自らにとっての帰属対象でもあった事情について、上原が「国民・大衆・庶民」という語を用いるときには「常に対極には知識人、専門家が意識されている」ことに注意を促し、無責任な知識人に対する強烈な批判と、「社会と自己の間のこののっぴきならない関係の感覚とそのような中からいやおうもなくなされる問題直感こそ、上原自身も共有するものだとも感じていた」⁸³⁾と述べて、上原の大衆帰属意識の契機を探っている。そして、上原が知識人との間に一線を画し、自らは「大衆」の一員であると感ずる根拠を次のような上原発言に求めている。

「私は、幼少年のころ家庭にちょっとした不幸があったりして、与えられた状態の下で、ひとの心を傷つけず、さればとって自分の心も傷つかないような、そのような自分の在り方とは一体どんなものであろうか、というようなことに思いたさざるをえないような生活環境に置かれた」、上原は、世界史研究、研究方法の吟味、実践活動等はすべてこの「与えられた状態の下でひとの心を傷つけず、自分の心も傷つかないような」〔上原〕あり方を求めて、やむをえず行ってきたものにすぎないと述べている。⁸⁴⁾

村井氏は、この上原発言について「このように身近で平凡な動機から出発して『世界史の全動向、現代社会の全相貌』にまで考察がすすむということは、とてつもなくきびしい内面的な緊張が要求されると思われる」⁸⁵⁾と述べている。

H 村井氏は、上原が「世界史家としての自己存在を先験的に措定し了解してしまっている」ととらえる岡村達雄氏の見解⁸⁶⁾を肯定する文脈で、「自分も平凡な庶民の1人である、それ故世界史像の自主的形成にとりくむのだというときの庶民像と、実際の国民大衆のありようとにずれがあった」、「上原の国民像と実像のずれこそ、上原の教育思想の最大の問題性であったといえよう」⁸⁷⁾と指摘する。しかし、その一方で村井氏は、このずれがあったからこそ、上原がこのずれを放置しなかったからこそ、上原は激しい大衆批判を行い、膨大な教育論・歴史認識論を展開し得たと積極面をみると同時に、岡村氏の上原批判のように上原の「営みは決して『自閉』などしておらず、その主張は常に国民の前に共有しうる形でさし出されてきたといえるだろう」⁸⁸⁾と岡村氏とは異なる見解を示している。

I Hのように上原思想の積極面をみようとする村井氏は、しかし、その結論で1965～69年の上原は、「国民に働きかけることをやめてしまっている」、「教育論という形ではさし出されなかった、される予定もなかったことは、日本の庶民に対する見限りという側面を内包しているのではないだろうか」⁸⁹⁾ととらえている。

② その意義に関する吟味・検討

以上の指摘のうち、B、CおよびDは大変鋭く、説得力のある分析であり、有意な視点である。ただし、村井氏の同論文の結論にかかわるAおよびIについては、次の理由から相当しないと考えられる。第1には、前掲した田中昌弥氏の指摘Bにあるように、上原は晩年においても「教育」について期待する発言を行っているからである。第2には、村井氏はあえて狭義の「教育」への上原の関与を擬視しているが、上原理論の基本命題は、「現代」認識のため、「生活現実の歴史化的認識の主体性の形成、確立、鍛錬」である。この基本命題につながる主体性形成論は、戦前・戦中期から晩年にいたるまで一貫して上原理論の中に存在していた。「国民教育」論は、この主体性形成論の一環である「国民形成の教育」論として位置づけられている。こうした上原の基本発想をおさえるならば、「主体性形成」と狭義の「教育」との関連をとらえながら分析する必要がある。こうした視点や枠組みを持つならば、村井氏が記した時期区分ではなく、戦後1940年代後半期および1969年以後の「回向」闘争期のみならず、戦前・戦中期における上原思想の営みを視野に入れることが求められる。

E、Fの指摘については、上原によるインテリ批判と大衆批判とを無原則的に同一視することはできないと考えられる。上原の民研辞職は、インテリ批判、労組批判に基づくものである。

Gの指摘の中で村井氏が「身近で平凡な動機」と理解した上原の幼少期の境遇は、実父が日清・日露戦争に従軍したことが原因で帰国後まもなく病没し、京都市内で悉皆業を営んでいた上原の家族が離散状態になったこと、上原自身は愛媛県松山市の叔父の元で養子となってすごしたことである。この境遇は、上原の戦争否定意識につながる重要な契機であり、決して「身近で平凡な」とは言い切れない性質のことである。

2 櫻井欽氏の「上原専祿における教育と宗教—『歴史』概念と日蓮観をめぐって—」

① そのモチーフと主要論点

櫻井欽氏の「上原専祿における教育と宗教—『歴史』概念と日蓮観をめぐって—」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻（1999年））は、上原の「歴史」概念がその教育観と宗教観とを結ぶ重要概念であったと考え、両者の関連を考察したものである。教育学関係の関心からの考察の中では、上原の日蓮観や宗教理解にまでふみこもうとした貴重な研究であり、主として次のような論点を提出している。

A 櫻井氏は、上原理論における「教育と歴史との有機的連関性と相互媒介性」（上原の用語）に着目する。すなわち、教育は「歴史的なもの」（教育の歴史形成性）であり、また「教育は歴史のなかで歴史に規定されながら行われる」（歴史の教育規定性）という関係が相互媒介的関係にあるというものである⁹⁰。

B 櫻井氏は、上原理論において「歴史的思惟方法」と「非歴史的思惟方法」という対立的な二種類の思惟方法があり、1であげた点と関連していえば、「歴史的思惟方法」による教育把握が主張されるが、通常の仏教については、上原は「非歴史的思惟方法」をとる宗教であるとみている点を指摘する。そして櫻井氏は、それにもかかわらず、上原にとって日蓮は、歴史的・政治的問題状況との関わりで教義や信仰内容を新しく創造した意味で顕著な人物であるとして、「歴史的思惟方法」の論理から積極評価される点に注目する。櫻井氏は、さらに、こうした意味でとらえられた日蓮が上原にとって時代を超えた意味を持つ指導者として、すなわち「非歴史的思惟方法」の論理で理解されている点にも注目する⁹¹。

C 櫻井氏は、その上で冒頭の関心主題について、次のように述べる。「〔前略〕いみじくも『生者』は歴史を超越した『永遠の存在』である『死者』の『歴史形成のメディア』となるべきという晩年の主張と、『教育の歴史形成性』という教育論の主張とが『歴史形成』という点で重なることにもみるように、上原において『教育』とは、上述の宗教論の構造〔『死者・生者』論—引用者〕において、現代の歴史の場における『歴史形成』の実践の一領域を構成するものであったのである。〔中略〕上原の思想においては、日蓮への宗教的関心を現代の歴史の場で実践する一つの領域が『教育』であったと解釈できるのである」⁹²

② その意義に関する吟味・検討

Aの点は、上原本人の説明（前掲した「教育と歴史との有機的連関性と相互媒介性」）から導かれることである。

BおよびCの指摘に関連することとして、筆者（片岡）の旧稿⁹³では、上原理論の基本命題が「現代」認識のための、「生活現実の歴史的認識の主体性の形成、確立および鍛錬」であり、この命題が少なくとも上原の戦後の生涯を一貫されていたことを指摘した。この主体性形成論理解からみて、櫻井氏が広く一般にみられる狭義の「教育」観から上原理論をとらえたり、批判する傾向に警告を發し、「歴史形成」の一環としての実践と「教育」との接点を見いだそうとする関心は意義があると思われる。

ただし、櫻井氏が立ち入った上原の「歴史的思惟方法」と「非歴史的思惟方法」との連関および、これとの関連での上原の宗教観の内実に分け入って分析する際には、少なくとも1940年に公にされた前掲の「史心」概念⁹⁴が戦中・戦後史の中で發表された著作の中でどのように位置づいているのかという問題を解明することが必要不可欠である。繰り返しになるが、筆者（片岡）は、現在のところ、この「史心」が上原思想の展開の中で中心軸となっていると考えている。

この「史心」では、あらゆる事象が「相対化」の対象とされた上で、「相対化されえない」「絶対境」が探求される。櫻井氏の同論文では括弧（「 」）つきで表記しつつではあるが、「死者」がすべて「歴史を超えた存在」であると想定されているのではないかととらえられるような理解が散見される。しか

し、上原理論では、上原提起に関わる実践者・認識者個々人にとっても、上原自身にとっても任意の「死者」ではなく、特定の意味を持つととらえられた特定の「死者」を、その「生者」にとっての「メディア」とすると考えられている。

おわりに

以上に現在までの上原専祿理論研究の到達および課題のうち筆者（片岡）以外によるものを研究者毎に整理した。そこでは、『日本国民の世界史』の編集論理、マルクス主義歴史学に対する上原の考え、認識方法にみられる強烈な「内面化志向」、「衆生」の一人としての「個」観念をはじめとして多数の成果が積み重ねられていることが確認された。また同時に、「その意義に関する吟味・検討」の欄で既述したように残された課題も少なくないことも事実である。これらの諸課題を総括的に集約するならば、少なくとも次の5つの作業課題が残されている。これらを筆者（片岡）の上原研究の成果および課題を織り交ぜながら以下に述べることにする。

- 1 まず最重要課題として、上原思想・理論の基本的枠組みを構成することがあげられる。

筆者（片岡）は、上原思想・理論の基本主題は、「現代」認識のための「生活現実の歴史化的認識」の「主体性」の形成、確立および鍛錬という一句に集約される「主体性」論にある、と考え⁹⁵⁾、またこの作業に取り組む上での認識方法の基軸は既述した「史心」である、とみている。

世界史論、学問論、宗教（批判）論、「国民文化」論、「国民教育」論や「インテリと大衆」論等にわたる上原による個々の提起・発言を一貫する基本発想（哲学）の内実と射程を深くおさえた上で、「上原学」ともいべき思想・理論総体の枠組みを構成することは、上原研究の不可避の課題である。なぜならば、こうした枠組みを構成することなく、細部の分析を試みるのみでは支障が生まれることは明らかであるからである。

- 2 第2には、1で既述した基本枠組みが上原の生涯をとおしてどのように展開ないし変容していったのかということ各時期の客観状況と照合させて把握するという課題があげられる。この作業を通してはじめて上原の生涯にわたる時期区分が可能となる。

その際、幼少時や青年期の思想形成の時期から1969年～1975年の「回向」闘争を重ねた時期を捨象することなく、全生涯を通した時期区分を試みる必要がある。

日蓮や法華経への関心、ヨーロッパの思想・文化に対する強烈な「主体性」指向は、上原の生涯を通して一貫して保持されていた。また、筆者（片岡）は、前述した「死者・生者」論に通じる発想は、遅くとも1961年にみられることを指摘した⁹⁶⁾が、その前史状況は、現在のところまだ明らかにされていない。

- 3 第3に、上原理論における基本概念や基本的な用語の意味内容や諸概念の連関を分析することがあげられる。その際、上原本人による説明の後追い確認作業に止まることなく、それらの具体的内容に分け入った考察が必要である。筆者（片岡）は、上原の「生活現実の歴史化的認識」や「地域」概念およびその前提となる価値づけ論⁹⁷⁾、「課題化的認識」と「主体性」概念⁹⁸⁾、「地域—日本—世界を串刺しにして把握する」認識方法⁹⁹⁾といった上原固有の発想や方法の内実について分析を始めている。ただし、「歴史的思惟方法」と「非歴史的思惟方法」、「個体生命」、「死者のメディア」等の重要概念・用語の分析がまだ残された課題となっている。

4 上原は1で約言したような基本主題や方法を持って日本社会における「知」、「文化」および「教育」の構造的な転換を目指して「闘争」を重ねた。しかし、上原自らが語るところによれば、一橋大学の改革、国民文化会議、国民教育研究所等、これらの「闘争」に取り組む「集団思考」の場では「敗退」せざるをえなかった。上原は、1964年5月に国民教育研究所（研究会議長であった）を辞職した後は、妻と長女および上原から成る「戦友集団」を岩として「世界史像の自主的形成」の作業に取り組んだ¹⁰⁰。このような上原の「敗退」をめぐる周囲の客観的要因および上原自身に内在した要因を明らかにすることが重要である。

それは、上原が自他に対してまことに厳しく迫った諸課題が周囲の個人や団体・機関にとって受け入れることができないものであったか否かという問題を追究することは、日本戦後史を分析する上でも有効な視点になり得る。

5 最後に、上原が強い関心を寄せ続けた日蓮認識や法華経認識をはじめとする宗教論は、果たしてどの程度まで「彼岸」世界を語ろうとするものであったのか、ということを追究する課題があげられる。すなわち、上原提起は、むしろ既成の宗教に対する批判論であり、現世の世俗世界に実在する力としての「意識」や「精神」のあり方を訴えるものであったのではないかと考えられる。上原は、日蓮認識、親鸞認識や法華経認識については強い関心を持っていたが、特定の宗派や教義を信仰するという態度ではなかったと理解されるのである。この点に関して厳密な考察が求められるが、この点は、前掲した「史心」の方法とも関わる点であり、「上原学」の本質に関わる重要な論点である。

(注)

1) この点について、石原保徳氏は次のように述べている。「[前略] ここで広く上原の生と学問の世界に目を向けるならば、とりわけ、その最晩年、つまり彼が『本を読む・切手を読む』（前掲『クレタの壺』所収）で『被殺』され、『死者として新しく実存するにいたった妻との交流の道を懸命に模索し』、それを可能にする『回向』としてひたすらに読書したという一九六九年四月二十七日以降に、刊行されたり用意されていた諸作品、例えば、前記『クレタの壺』、『歴史的省察の新対象 新版』（一九七〇年刊、「著作集」⑮）、『死者・生者—日蓮認識への発想と視点』一九七四年刊、「著作集」⑯）、『経王・列聖・大聖—世界史的現実と日本仏教—』一九八七年刊、「著作集」⑳）などで試みられた峻厳きわまりない学問実践は、読む者に、自らの生と学問を厳しく吟味することを要請せずにはおかないものがある。それだけに、上原のこのような営為にふれて、たじろぎ、身を守るためにもそれを棚上げしてよし、とする傾向がしばしば見られるが、それは寒々とした独善的な学問風土を実証する以外のなにものでもない」（括弧内は原文）石原保徳『世界史への道（前篇）—ヨーロッパ的世界史像再考—』丸善ライブラリー、1999年、212—213頁。

2) 石原、同前書、271頁。

3) 石原『世界史への道（後篇）—ヨーロッパ的世界史像再考—』丸善ライブラリー、1999年、257頁。

4) 石原、前掲『世界史への道（前篇）—ヨーロッパ的世界史像再考—』214頁。

5) 石原、同前書、228頁。

6) 石原、同前書、236頁。

7) 石原、同前書、238頁。

8) 石原、同前書、239頁。

9) 石原、同前書、239—240頁。

- 10) 石原、同前書、241-244頁。
- 11) 石原、同前書、256頁。
- 12) 石原、同前書、256-257頁。
- 13) 石原、同前書、257-258頁。
- 14) 石原、同前書、265-266頁。
- 15) 石原、前掲『世界史への道（後篇）—ヨーロッパ的世界史像再考—』249頁。
- 16) 石原、同前書、250-260頁。
- 17) 例えば上原「国民形成の教育」(『岩波講座 現代教育学』4、岩波書店、1960年に収載)等の1960～1961年の上原提起をめぐる反論について上原は「日本における独立の問題」(初出は1961年、後に『上原専祿著作集(以下、著作集と記す)第14巻 国民形成の教育 増補』評論社、1989年に収載)で論じている。
- 18) 浜林正夫『現代と史的唯物論』大月書店、1984年、3-5頁。
- 19) 浜林、同前書、18頁。
- 20) 浜林、同前書、18-19頁。
- 21) 浜林、同前書、22-28頁。
- 22) 浜林、同前書、28-34頁。
- 23) 浜林、同前書、31頁。
- 24) 浜林、同前書、31-32頁。
- 25) この「民族と階級」の問題をめぐるのは、高島善哉氏からの上原理論批判がある。高島氏は、厳密な社会科学理論の体系化を指向する関心から「民族」は「それ自体として独立の主体でないとしても、歴史と社会の形成者としての階級主体に浸透することによって、一つの主体的な役割を果すもの」であると述べ、「主体としての階級にたいして民族は母体だというべきである」と主張する。このように「階級」を主体として社会科学体系の構築を目指す立場から高島氏は、「ナショナルなもの」に対する慎重な対応を強調して次のように述べて上原の「民族の独立」論や「国民」論を批判する。
 「[上原の『歴史学序説』について—引用者]ここでもなお主体としての国民はまだそのまったき意義において分析され規定されていない。それはふたたび実感主義としてのナショナリズムを招きよせる危険を含むものといえるであろう」(高島善哉「現代社会思想史の課題」、高島善哉・水田洋・平田清明『社会思想史概論』(岩波書店、1962年、367頁)高島氏は、「『民族』は『国民』の前段階をなすものであり、国民こそ真に世界史形成の主体的な要因としてわれわれの前に現れているのではないのか」という説を「国民主体説」と呼び、次のように明示して上原理論を批判している。
 「[前略]ここにいわゆる国民主体説なるものは、国家主体説に比べれば自由主義的民主的な思想をふまえていることは評価されなければならない。だが国民が主体であるというのはいったいどういうことなのか。そもそも国民とは何か。この点に関する理論的な解明がないかぎり、私たちはこのような見方を受け入れるわけにいかない。理論的に国民は国家と民族の中間に位置する概念である。戦後、私たちの囲りに現われては消え、消えては現われた国民会議、国民政党、国民文化、国民教育といった諸概念は、すべてこのような中間的性格を持っているものと評価してよいだろう(私がこういったとき、上原専祿氏によって指導され、一時わが教育界に大きな影響力を及ぼした『国民文化会議』のことを連想する読者があるかもしれない。私も実はそれを念頭においているのである)」[括弧内は原文](高島善哉『民族と階級』現代評論社、1970年、12-13頁)

- 26) 田中陽兒「歴史学と『世界史』教育」、『岩波講座 世界歴史 30 別巻 現代歴史学の課題』岩波書店、1971年、536頁。
- 27) 田中陽兒、同前論文、536—537頁。
- 28) 田中陽兒、同前論文、537—538頁。
- 29) 田中陽兒、同前論文、540—541頁。
- 30) 田中陽兒、同前論文、542—543頁。
- 31) 田中陽兒、同前論文、543—544頁。
- 32) 田中陽兒、同前論文、546—548頁。
- 33) 田中陽兒、同前論文、548—549頁。
- 34) 田中陽兒、同前論文、549—550頁。
- 35) 福田定良氏による書評「宗教批判の手がかりとして—上原専祿『死者・生者』」、『朝日ジャーナル』1974年7月26日号。後、評論社の『上原専祿著作集通信2』（1988年10月28日）に再掲載。
- 36) 吉田悟郎「世界史の起点」、吉田『世界史の方法』青木書店、1983年、18頁。
- 37) 上原「本を読む・切手を読む」、『著作集第17巻 クレタの壺—世界史像形成への試読—』1993年、317頁。
- 38) この点について、石川武男氏が『毎日新聞』（1981年8月14日付、夕刊）の「めぐりあい」欄で紹介している。
- 39) 渡辺「上原史学の発展と『日本における独立の問題』（『思想』6月号所載）について」国民教育研究所（以下、民研と記す）『国民教育研究』No2、1961年、43頁。
- 40) 渡辺、同前論文、43頁、45頁。
- 41) 渡辺、同前論文、45—46頁。
- 42) 渡辺、同前論文、46—52頁。
- 43) 渡辺、同前論文、49頁。
- 44) 渡辺、同前論文、52頁。
- 45) 渡辺、同前論文、51頁。
- 46) 渡辺、同前論文、51—52頁。
- 47) 上原著・発行『家君退隠記念文集 史心抄』（非売品、1940年）における「『史心抄』序」6—9頁。
- 48) 岡村達雄『現代公教育論—臨教審批判と変革への視座 [増補改訂版]』社会評論社、1986年、256頁。
- 49) 岡村、同前書、269頁。
- 50) 岡村、同前書、226—227頁。
- 51) 岡村、同前書、237頁。
- 52) 岡村、同前書、233—234頁。
- 53) 岡村、同前書、237—246頁。
- 54) 岡村、同前書、250頁。
- 55) 岡村、同前書、265頁。
- 56) 岡村、同前書、260—261頁。
- 57) 岡村、同前書、346頁。

- 58) 片岡弘勝「上原専祿『課題化的認識』論における『主体性』概念—『インテリの大衆化』論と学習論の接合方法を中心に—」（『日本社会教育学会紀要』No37・2001年度（日本社会教育学会、2001年6月発行予定）に投稿し、その掲載決定）
- 59) 上原「本を読む・切手を読む」、前掲『著作集第17巻 クレタの壺—世界史像形成への試読—』271—283頁。
- 60) 上原『歴史的省察の新対象』弘文堂書房、1948年。1970年にその新版（未来社）が刊行され、『著作集』には『第15巻 歴史的省察の新対象 新版』が1990年に刊行された。
- 61) 上原「愚案録」、『一橋会雑誌』第141号、1918年10月24日。後、『著作集第18巻 大正研究』1999年、231—238頁。
- 62) 藤岡貞彦『社会教育実践と民衆意識』草土文化、1977年、藤岡貞彦「Ⅲ. 発達環境と学習」の「2. 地域」、『岩波講座 教育の方法 2』岩波書店、1987年。
- 63) 朱浩東『戦後日本の「地域と教育」論』亜紀書房、2000年、161—170頁。
- 64) 朱、同前書、205頁。
- 65) 朱、同前書、205—206頁。
- 66) 上原弘江「編者あとがき」、『著作集第19巻 世界史論考』1997年、709—711頁。
- 67) 注1)。
- 68) 田中昌弥「上原専祿における認識方法と教育観の変遷—近代合理主義と個性的理解の問題をめぐって—」、東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室『研究室紀要』第18号、1992年、110頁。
- 69) 田中昌弥、同前論文、110頁。
- 70) 宮菌衛「上原専祿による世界史像形成への出発—1940年代後半における『世界史』への取り組み—」、筑波大学大学院教育学研究科『教育学研究集録』第11集、1987年、79頁。
- 71) 宮菌衛「上原専祿の世界史論の展開（1）—『民族の自律性』に焦点を当てて—」（『新潟大学教育学部紀要』第30巻第2号・人文・社会科学編、1989年、291頁。
- 72) 宮菌衛「上原専祿の世界史論の展開（2）—世界史認識における『地域』の意義—」、『新潟大学教育学部紀要』第32巻第1号・人文・社会科学編、1990年、73頁。
- 73) 宮菌、前掲「上原専祿による世界史像形成への出発—1940年代後半における『世界史』への取り組み—」78—79頁。
- 74) 宮菌衛「上原専祿の世界史論の展開（2）—世界史認識における『地域』の意義—」79頁。
- 75) 宮菌衛、同前論文、83頁。
- 76) 片岡弘勝「戦後主体形成論における『地域』概念—上原専祿『生活現実の歴史化的認識』論の構造—」、『日本社会教育学会紀要』No34、日本社会教育学会、1998年。
- 77) 村井淳志「上原専祿の教育観と国民観」、東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第5号、1986年、33頁。
- 78) 村井、同前論文、30頁。
- 79) 同前。
- 80) 同前。
- 81) 村井、同前論文、31頁。
- 82) 村井、同前論文、32頁。
- 83) 村井、同前論文、33頁。

- 84) 村井、同前論文、34頁に引用。
- 85) 村井、前掲論文、34頁。
- 86) 岡村、注52)。
- 87) 村井、前掲論文、34頁。
- 88) 村井、同前。
- 89) 村井、同前。
- 90) 櫻井愼「上原専祿における教育と宗教—『歴史』概念と日蓮観をめぐって—」、「東京大学大学院教育学研究科紀要」第39巻、1999年、79—84頁。
- 91) 櫻井、同前論文、80—84頁。
- 92) 櫻井、同前論文、84頁。
- 93) 片岡弘勝「上原専祿『国民教育』思想研究序説（その一）—『地域と教育』論の基本構造—」、「名古屋大学教育学部紀要—教育学科—」第35巻、1989年。
- 94) 注47)。
- 95) 片岡、前掲「上原専祿『国民教育』思想研究序説（その一）—『地域と教育』論の基本構造—」。
- 96) 片岡弘勝「戦後『学問の生活化』論の基底—成人学習内容論における上原専祿理論の位置と射程—」、「香川大学生涯学習教育研究センター研究報告」創刊号、1996年。
- 97) 片岡、前掲「戦後主体形成論における『地域』概念—上原専祿『生活現実の歴史化的認識』論の構造」および片岡「戦後成人学習内容論における『地域』概念—上原専祿『地域—日本—世界の統一的把握』論の方法意識—」、「香川大学生涯学習教育研究センター研究報告」第3号、1998年。
- 98) 片岡、前掲「上原専祿『課題化的認識』論における『主体性』概念—『インテリの大衆化』論と学習論の接合方法を中心に—」。
- 99) 片岡、前掲「戦後成人学習内容論における『地域』概念—上原専祿『地域—日本—世界の統一的把握』論の方法意識—」。
- 100) 上原、前掲「本を読む・切手を読む」283—319頁。

